農業水利偉人伝 ③

農業水利の開発により、領内の産業振興を行った

木下俊長

主な事業
- 辻の堂池
- 倉成村大堤
- 富水池

慶安元年（1648年）～享保元年（1716年）

改修した富水池

木下俊長の愛用したコマ（胡馬）の家紋

松屋寺（日出木下家の菩提寺）の蘇鉄

七島い

元日出城二の丸（現日出中学校）のサザンカ（樹令約四百年）

大井手（倉成村大堤）

木下俊長の建てた若宮八幡楼門にある、右大臣・左大臣の像

年号	元号	年齢	生涯
一六四八	慶安元年	1	誕生
一六六一	寛文元年	14	日出藩第三代藩主となる
一六六一	寛文元年	14	元服
一六六三	寛文三年	16	付領に逃散する農民（八九五四人）が木知（ちち）を駆る
一六六五	寛文五年	18	福知山城主朽木氏の娘（こうき）と結婚
一六六七	寛文七年	20	深江に茶室「襟江亭」を建てる
一六七五	延宝三年	28	禁ずる領地の自由な出入りを
一六七六	延宝四年	29	川崎の清家塩浜を検地する
一六七八	延宝六年	31	井手八幡に鳥居を寄進する
一六八六	貞享三年	39	日出城内に春風楼を建てる
一六九五	元禄八年	48	八坂村庄屋減税を訴願
一六九七	元禄十年	50	領に逃散農民（二九二一人）が木付
		56	三月不作のため減税
一七〇四	宝永元年	57	一月に夫人逝去する
		58	改める「日出城」を「暘谷城」と
一七一六	享保元年	69（数え）	逝去する九月八日日出にて

年齢	工事業績
24 25	辻の堂池
24 25	山浦大池
39 40	倉成村大堤
39 40	上川久保井手
47	照川ノ池
50	笹原池
56	後谷の池
59	新百姓池
61	水谷池
64 65	
66 67	長河原池（富水池）
68	津島池
68	東岡池

木下俊長 系図

- 明智光秀 ― ガラシア（玉）
- 細川藤孝 ― 細川忠興 ― 忠利
- 豊臣秀吉 ― 秀頼
- ねね（高台院）
- 木下家定 ― ①木下延俊 ― ②俊治 ― ③俊長 ― ④俊量
- 延由（立石初代）
- 加賀

日出藩のため池づくり

24歳～66歳
［1671年～1713年　寛文11年～正徳3年］

日出藩の産業振興の礎（いしづえ）となる「ため池づくり」に俊長は着手する。

辻の堂ため池

木下俊長が藩主となって２年後、寛文３年（1663年）に農民「8,954人」が木付領に逃散するという大事件が起こる。分知した立石領の８ヶ村のうち「日損所（ひそんしょ）」は１ヶ所しかなく、俊長の治める20ヶ村のうち「日損所（ひそんしょ）」は11ヶ村に上ることとなっていたのである。

水の不足する農地で、農民は疲れていた。農民の生活を楽にするために俊長は、新規農産物である七島いを導入しようとするが、やはり農業用水が必要であり、俊長としては産業振興を行ううえにも農業用水の開発は、非常に重要な施策の１つであった。

若宮八幡宮

立藩当初の日出藩３万石は、立石領８ヶ村を含む28ヶ村であった。

３万石の内訳は、田の石高と畑の石高から成っていた。

総体的には、田の石高の比重が大きかった。

しかし、『正保郷帳』によれば、28ヶ村のうち12ヶ村を「日損所（ひそんしょ）」（水の不足する所）と注記していた。

寛永19年（1642年）に、立石領８ヶ村の5000石が木下延由公（のぶよし）に分知（領国分け）されて以降、城下に近い７ヶ村を「里目（さとめ）」、八坂川流域の13ヶ村を「山里（やまざと）」と呼んだ。

〈俊長のため池築造年表〉

年号	西暦	年齢	
寛文元年	1661年	14	７月に日出藩第３代藩主となる
寛文３年	1663年	16	農民「8954人」が木付領に逃散する
寛文11年	1671年	24	北大神の辻の堂池を築く
12年	1672年	25	山浦村大池を築く
貞亮３年	1686年	39	倉成村大堤を築く
４年	1687年	40	上川久保に井手を築く
元禄７年	1694年	47	大神「照川ノ池」を築く
元禄10年	1697年	50	藤原「笹原池」を築く
元禄16年	1703年	56	大神「後谷の池」を築く
宝永元年	1704年	57	藤原「長河原」（富水池）の現地見積り
宝永３年	1706年	59	仁王「新百姓池」を築く
宝永５年	1708年	61	藤原「水谷池」を築く
正徳元年	1711年	64	藤原「長河原」（富水池）の湖底調査
正徳２年	1712年	65	長河原池（富水池）工事開始
正徳３年	1713年	66	津島「芝尾池」を築く 川崎「東岡池」を築く
正徳４年	1714年	67	長河原池（富水池）工事完了
正徳５年	1715年	68	富水池の名前が決定
享保元年	1716年	69	９月８日俊長、日出において卒す

エピソード１　日出藩は、豊臣氏？豊富（とよとみ）氏？

日出藩主　木下家は、木下藤吉郎秀吉の妻ねねの兄木下家定の三男の家系である。

そのため、俊長の父　延俊の建てた若宮八幡宮の鳥居には「…豊富朝臣延俊（とよとみのあそんのぶとし）…」の文字が刻まれている。

富水池の築造

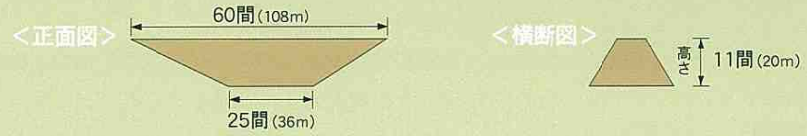
65歳～67歳
[1712年～1714年　正徳２年～正徳４年]

日出藩最大のため池造りに、晩年の俊長は満を持して取り組む。

俊長が築造した富水池（改修前の姿）

俊長の築造した富水池の概要

築造時の富水池の寸法は、次のように示されている。



惣夫数（働いた人の数）
- 領内農民16～60才
- 延べ　30,000人

＜富水池築造の経緯＞

57才で計画を立て、65才で南藤原覚雲寺村の長河原の大池築造に着手する。

- 宝永元年（1704年、57才）３月
  俊長は、水原にお茶屋を建て富水池築造に備える。
- 宝永元年４月８日
  郡奉行、各庄屋とともに現地を視察した。
- 宝永元年４月17日
  郡奉行、各庄屋の他、大工伝九郎とともに現地で水盛（測量）を行った。
- 正徳２年（1712年　65歳）１月７日
  工事を開始した。
  領内の16～60才までの4,800人に出役を命じた。

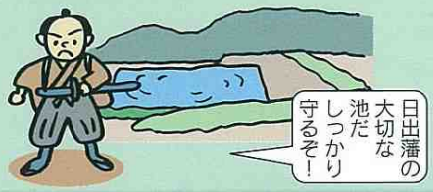
エピソード② “しょうけ池”って何？

地質の悪い所では水持ちの悪いため池しかできない。
こういう池は、しょうけ（ざる）池と呼ばれ水を多く貯めることはできない。
俊長の造った「辻の堂ため池」も“しょうけ池”であった。そのため、改修を行い保水の良い池となった。

＜「辻の堂ため池」の改修方法＞
漏水のあった、池の西の土手を深く掘り、粘土質の土を入れた。

エピソード③ 富水池には、警固の武士がいた？

富水池の下流、数百mの所に家が１軒あった。
その家には、富水池の警固をする武士が住んでいたそうである。
今回のため池改修の用土の一部に、この敷地の山からとった土を使用した。



エピソード④ 仕事の辛さから逃げるために……

ため池の盛土工事は、主に雨の少なくなる冬に行われる。盛土工事は、雨に弱いためである。大きなため池工事の盛土は数年もかかるので、梅雨の前までに大雨に対する安全対策がとれる高さまで、盛土工事をやり上げなければならない。
そのため、盛土工事の迅速さが求められ、大きなため池工事では労働条件が厳しい工事となる。
富水池でも、厳しい工事であったため、出役した農民は便所でやっと休憩を取ることができたことが言い伝えられている。

産業振興　七島いの生産…

領民の生活を安定させるため、俊長は新しい農作物に挑戦した！

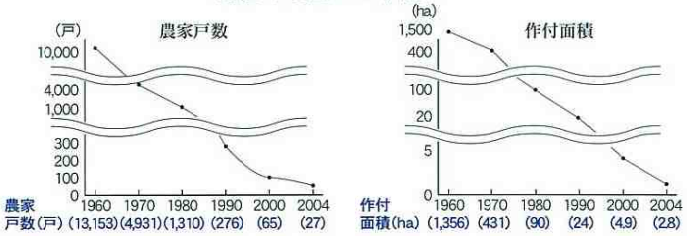
七島い(七島藺)**とは**

- カヤツリ草科に属する多年生草本
- 茎は、三角形状で、生育極めて旺盛
- 生育最盛期には、１日に20cmも伸びる
- 現在、七島いは、国東半島で、小面積ながら栽培されている。
- 一戸で作れる面積が限られているため、生産者の高齢化とともに減っている。

平均的栽培面積６～７アール/戸。

年号	西暦	藩主名	年齢	内容
寛文元年	1661年	木下俊治（日出藩）	48才没	日出藩、長谷川伝兵衛を薩摩に派遣し七島いの技術を伝習させる
寛文元年	1661年	木下俊長（日出藩）	14才	長谷川伝兵衛、薩摩より、七島い及び莚織機持ち帰る。
寛文２年	1662年	木下俊長（日出藩）	15才	日出藩より、杵築藩へ、七島い苗伝授される。
寛文３年	1663年	松平忠昭（府内藩）大給松平初代	47才	府内商人、橋本五郎右衛門、薩南諸島の小島より、七島い苗持ち帰る。
正徳４年	1714年	木下俊長（日出藩）	67才	日出藩、農家が八朔の節句に殿様に初莚の献上。明治まで続く。

現在の七島いの状況



＜導入の経緯＞

初代藩主、木下延俊の時代に領内山香郷鶴成金山に、諸々からの鉱夫が来ていた。薩摩からの鉱夫は、鉱夫納屋に青莚（あおいむしろ）を敷いていた。

これを金山奉行が見て、生産を行うように藩主に進言した。しかし、木下氏は入国間のない時期であったので、取り上げることができなかった。

二代藩主俊治の代に、金山奉行が再度苗の移入を進言したところ、実現の運びとなった。

俊治は、薩摩候に頼み一年がかりで植栽から織り方までを長谷川伝兵衛等に学ばせた。

しかし、長谷川等が帰藩した時、俊治はすでに亡くなっており三代目俊長の代になっていた。

俊長は、藤原村と八坂村に試植した。

四代俊量の代には広く周辺に普及した。領内の農民は俊長の徳を讃えて、八朔の節句（旧暦、八月一日）に、各村より初莚一枚を毎年藩主に献納することとなった。

松屋寺（菩提寺）

エピソード５

松屋寺は日出木下家の菩提寺であるが、２回火事になり、木下俊長の資料はその画像も含めて多くは残っていない。しかし、松屋寺の宝物殿で俊長の“千態観音図帖”を見ることができる。

エピソード６　七島いは鹿児島から日出を経て杵築へ

俊長が病となり平癒祈願を行ったところ無事回復したので、寛文２年（1662年）お礼に祈願成就の千本の通し矢を奉納することとなった。

杵築松平家の弓の名人である庄屋森永五郎衛門を招き、千本通し矢を奉納し祈願成就を済ませた。その賞品として、俊長は太刀と“七島い”を森永五郎衛門に与えた。

この苗は、見事に成長し杵築藩に広がった。

日出城の時鐘

木下俊長の人となり

木下俊長は、日出藩木下家の三代目として内政の充実を図らねばならなかった。
俊長の業績は、大きく次の3つに分けられる。

①産業振興……ため池造りによる米の増産、新規品目（畳表、塩等）
②神仏崇拝……領内鎮守としての神社・仏閣の経営
③城下町と学芸……城下の整備（時鐘）、
人見竹洞（朱子学の師、幕府の儒官）に師事

農業用水の開発は、このうちの①産業振興に深く関係している。
地域の農産物の振興に欠くことのできない農業用水の開発は、俊長にとって大きい課題の一つであったと思われる。

木下俊長公を祭る横津神社

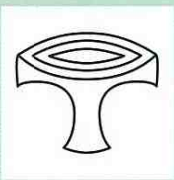
横津神社

俊長は、遺言で「儒葬を行い、横津に葬るように」と指示した。このため、俊長は他の藩主の眠る松屋寺から離れて葬られている。
碑面は、人見竹洞の子又兵衛の筆により「木下内蔵頭豊臣俊長墓」となっている。
横津神社のほかに、松屋寺墓所にも墓石がある。
法名は「桂峯院殿英岳宗哲大居士」である。

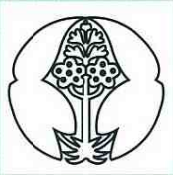
明治10年春、神葬に改め神殿を竣工した。
さらに、大正13年３月には郷社となった。
４月８日の横津神社春季例大祭には、ため池の恩恵をうける町内を神輿が巡行する。（藤原、日出、川崎、大神）

富水池は、日出領内にため池等を造りつづけた木下俊長の生涯最後で、最大の仕事であった。

エピソード 7　日出藩木下家の家紋



（胡馬）コマ



（沢瀉）オモダカ

- 幕府からの正紋は、沢瀉（オモダカ）である。
- 歴代の藩主は、別に胡馬（コマ）の紋を使用していた。この紋は、秀吉が後陽成天皇を聚楽第にお招きした折に賜った、三重ねの盃（天目杯）を象形化したもので、日出藩木下家初代延俊が秀吉から豊臣姓と共に賜ったものと伝えられている。
  木下独楽（コマ）とも呼ばれている。
  胡馬は小さい馬の意味であるが、盃は高麗焼であったので（コウライ→コマ）と、ゴロ合わせをしたのかもしれない。
- 三代目俊長は、特にこの紋を愛用されたとのことである。
- 沢瀉（オモダカ）紋も、通常のものは葉脈があるが、日出藩木下家の家紋には葉脈がない。
  葉の形が、松屋寺のソテツの枝を切った切り口に似ているともいわれている。

富水池の秘密 平成の大改修工事 [1996年～2000年　平成８年～平成12年]

俊長の造った富水池

改修の歴史が見える

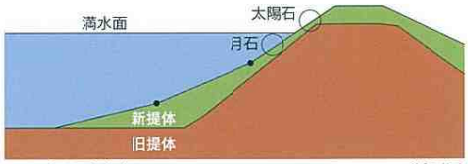
堤体に残る災害の跡

富水池の災害については、宝暦五年（1755年）、天保元年（1830年）明治16年（1883年）の大雨で大被害を受けたことが記されている。
江戸時代の天保元年の大雨では、堤が欠壊し下流に大きな被害を与えたようである。又、明治16年の大雨の時は、堤体の中央部が欠壊し３年の歳月をかけて改修工事をしたそうである。
今回の改修工事のために、堤体を掘削すると中央部にその欠壊の跡らしき所が出てきた。
子供達が立っている所が旧堤体を掘削した断面であるが、土の色が周囲と違うことが分る。

水を多く貯める工夫

旧堤体の石積み

今回の堤体改修では、堤体の安全性を高めるため、法面の勾配は盛土が安定する勾配で決定している。
しかし、俊長の富水池は、多くの水を貯めるために、お寺や、お城の石垣のように勾配のきつい石積みが築かれていた。
今回のため池工事でも、俊長の工夫にならって盛土の勾配を３通りに変え、水をなるべく多く貯められるようにしている。



●…勾配変化点
断面図

断層を避ける工夫

断層調査状況

ため池の地質調査を行ったところ、付近に活断層があることが分った。
江戸時代の人が断層をどう処理したのか、調査するために池の旧洪水吐の横を掘って確認を行った。
その結果、断層は掘削ヶ所に存在せずに、堤体の洪水吐から脇の山に斜めに抜けて、堤体に支障のないことが判明した。（点線の位置）
江戸時代の人が十分に現地踏査を行い、ため池の中心線をどこに設定するか検討していることが分る。

エピソード 8

富水池の改修を記念して、太陽と月の形をした石を石積の中に入れた。
太陽石の下の縁が満水面の高さである。
月石の下の縁が第２取水口と同じ高さになっている。満水の時は、水中にある。

ため池の基礎地盤

左下に座っている人から泥層の厚さが分かる。

富水池の堤体基礎には泥が堆積していた。
富水池を築造する前に小さいため池があったようで、その池に溜まった泥があったと思われる。そのため、俊長が施工する時は高い堤体を保持できる基礎を作るために、泥を出すのではなく、泥の中に石を投げ込んで堅固な基礎をつくることを考えたようだ。泥層の中に多くの石を見ることができる。
今回の工事では、その泥層の下の堅固な基礎地盤まで掘削を行い、盛土工事を実施した。

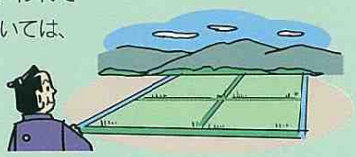
現れた水神様

工事中に現れた水神様

平成８年から平成12年まで、富水池の改修工事が実施された。堤体からの漏水等、老朽化が顕著になったためである。
周囲の木々の伐採を行ったところ、林の中から水神様が現れた。
俊長が祈ったであろう水神様は、現在は大切に池の横に祭られている。

エピソード 9　富水池によって、40haの田が上田になった！

富水池の水の恩恵を受けたのは、日出町の広域に及ぶといわれているが、特に、40haについては、上田（良い田）になったといわれている。



ため池改修前後比較表

	俊長の造った富水池	今回改修した富水池
洪水吐の大きさ	B=21.0m H=1.2m	B=13.6m H=2.05m
堤の高さ	H=16.5m	H=18.4m
堤体前法面の保護	全面石張	ＥＬ360m以上を石張
洪水調節機能	なし	５万ｔ
取水施設	木樋	斜樋φ250（ステンレス製）

エピソード 10　富水池の名前は“くじ引き”で決めた。

正徳５年２月24日、井手八幡宮の神前で、池の長久を祈願し、池の命名を行った。
池は、「長富池」「常磐池」「富水池」の三つの名前から、「おみくじ」により選んだ。

富水池 平成の大改修

平成8年～平成12年
(1996年～2000年)

俊長が精魂込めて造った日出町の水がめ「富水池」は今後も地域で守りたい財産である。

洪水時には、この高さ分の水を余分に貯めて、
下流に洪水が出てゆくのを遅らせることができる。

富水池の洪水調節機能

今までの富水池は、農業用水を貯めるだけの機能であったが、今回の改修により下流の洪水対策のために洪水調節機能を追加した。

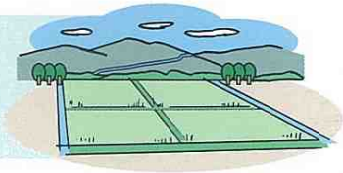
工事中の富水池

堤防の法面保護の石積み

今回の改修で、安全のために堤体の高さを高くしたため、法面保護の石積み面積は増加した。
そのため、旧堤体の石積みだけでは足りず新たに石を追加している。
昔は、法面勾配を立て、洗掘防止を図るために、全面に石を積んで法面勾配を立てていたが、今回は、法面安定のため法面勾配を緩くしたので、波による洗掘防止のためだけに石を積んだ。このことにより、法面の途中から石を積んでいる。

富水池の工事中に近くの藤原小学校4年生(35名)が、現地見学を行った。
池の底に降りて、記念写真をパチリ！

富水池の維持管理

ため池とその水を水田まで導く水路は、受益農家で組織している富水池土地改良区が維持管理している。
洪水調節機能を追加した富水池は、農家のみならず地域の人々の生活を守る施設ともなった。
俊長が、地域の繁栄を祈り築造した富水池は、今後ますます地域に貢献してゆくことだろう。

■参考文献：大分県史、日出町誌　■協力：日出町、木下家
■作成：大分県農林水産部農村整備計画課　■印刷：有限会社中央印刷